

エレミヤ23章23-29節

ヘブライへの手紙11章29節～12章2節

ルカによる福音書12章49-56節

本日の旧約日課は、エレミヤ書です。預言者エレミヤは、バビロン捕囚の時期に活動した南ユダ王国の預言者です。本日の箇所は、『聖書』では「偽りの預言者に対する言葉」という小見出しのある箇所の一部です（エレ23：9-40）。

預言者とは、主なる神様から言葉を預かって語る人のことです。一般的には予言者とも表記して、未来について語る人と理解されることもありますが、『聖書』の預言者は、未来にとどまらず、過去や現在の事柄についても、託された主なる神様の言葉を語ります。

預言者は、当然、主なる神様の側の人であるべきなのですが、偽預言者という言葉がある通り、そうではない人も存在しました。それは、預言者エリヤが戦った、バアル宗教など他宗教の預言者という意味ではなく、主なる神様から託されたとして、実はそうではない言葉を語る人のことです。

なぜ、そのような預言者が存在してしまうのか、それは、人々が自分たちの望みにかなう預言を受け入れたがるからです。逆に、自分たちに批判的あるいは不利な預言を受け入れたがらないからです。ある預言者と語る預言が本物であるか、偽りであるか、識別できるのは神様だけなのですが、そうであるがゆえに、人々の喜ぶ預言を語る預言者が存在してしまうのです。すべての人が喜ぶ預言であればまだよいのかもしれませんが、もっとも悪いのは、ごく一部の支配者や有力者に有利なことだけを、主の言葉として語る預言者です。

聖書日課ではありませんが、本日の部分が属する箇所の冒頭は、「預言者たちについて。私の内で心は砕かれ、骨はすべて震える。私は酔いどれのようにぶどう酒の酔いが回った男のようになった。それは、主のゆえ、その聖なる言葉のゆえである」（エレ23：9）とあります。ここは、預言者エレミヤの偽りの預言に対する怒りを、独特な表現で示していますが、個人的な感想ではなく、主なる神様の怒りを示しているのです。

その怒りのもととなる内容が、ここも聖書日課ではありませんが、「私は、サマリアの預言者たちの中に、嫌悪すべきものを見た。彼らはバアルによって預言し、私の民イスラエルを惑わした」（エレ23：13）にあります。バアルとは、カナン地方にある土着の宗教ですが、「バアルによって預言し」は、すでに滅んでいた北イスラエル王国において、バアル宗教が深く浸透してしまっていたことを示します。サウル、ダビデ、ソロモンと統一されていた主なる神様のイスラエル王国が、南北に分裂し、その後、北イスラエル王国が崩壊、その地の人々が、主なる神様ではなくバアル宗教の神様を信仰するようになったことは、残念なことです。それでも、まだ半分の南ユダ王国がしっかりと主なる神様を信じる王国であれば、希望がありました。しかし、預言者エレミヤは、「私は、エルサレムの預言者たちの中に、おぞましいことを見た。彼らは姦淫し、偽りの中を歩み悪をなす者の手

を強め誰も自分の悪から立ち帰らない。彼らは皆、私にとってソドムのものでありその住民はゴモラのものである。」(エレ23:14)と、南ユダ王国の中にも、バアル宗教に偏った預言を語るものがあったことを強く批判しているのです。その部分には「姦淫」という表現があります。具体的にどのようなことであったかは明記されていませんが、カナン地方に元来あった文化、風習、信仰を取り入れてしまうということにはほかなりません。

それらを受けて本日の箇所があります。「もし、彼らが私の会議に立っていたなら、私の民に私の言葉を聞かせ、彼らを悪の道から、その悪行から、立ち帰らせたであらうに。」(エレ23:22)。「私の会議」とは、「主の会議」(エレ23:18)と同じです。預言者は、主なる神様が主の御使いたちと一緒に会議をしている幻を見ることがあるからです(列王22:19-23、イザ6:1-8)。「私の名で偽りを預言する預言者たちが、『私は夢を見た、私は夢を見た』と言うのを、私は聞いた。」(エレ23:25)という表現は、偽預言者たちが、あたかもそのような幻を見たかのように語ったことを示します。しかし、実際にはそうではないのです。それゆえ、エレミヤは、「夢を見た預言者は夢を語るがよい。私の言葉を受けた者は私の言葉を真実をもって語らなければならない。」(エレ23:28)と語ります。前の訳では「夢を解き明かすがよい」となっていますが、今の訳の方が原文に近いのです。また「夢を見た」となっていますが、直訳は「夢を持つ」です。「夢を見る」と「夢を持つ」では、ニュアンスが異なりますが、ここで語っていることは、もし、主なる神様と御使いたちの会議という幻・夢を見て何かを示されたのなら、それをそのまま語りなさいとエレミヤは命じているのです。間接的には、自分の願望や、都合のよいことを主なる神様のこととして語るな、とも示していると思います。

エレミヤのこの批判は、偽預言者のみならず、偽預言者の語る偽の預言を喜んで受け入れる人々にも及びます。本日の箇所の少し後で、「主の託宣」について話題となったところですが、「それゆえ、私はあなたがたを全く忘れ、あなたがたと先祖たちに与えた町を、私の前から捨てる。そして私は、あなたがたに忘れることのできない永遠のそしりと永遠の辱めを与える。」(エレ23:39-40)と語るのです。エレミヤの活動中に、「あなたがた」である南ユダ王国は滅亡します。それが歴史的事実として起こり、また、今、ここ教会の中で、二千年以上の時を超えて、そのことを語っているということは、これらの言葉がまことに主の預言であったことの証です。

わたしたちは、生きている時代も地域も、エレミヤとは異なります。そして、わたしたちは、教会に集められるものとして、イエス様の愛に基づいた歩みを大切にすることを求められています。しかし、わたしたちにも、エレミヤが語り掛けた人々と同じように、自分たちに都合のよい預言は聞きたい、そうでなければ聞きたくないという傾向はあると思います。また、イエス様の言葉は、耳に優しい言葉ばかりではなく、本日の福音書のように、偽りの「平和」を批判する厳しい言葉もあります。それゆえに、イエス様のご生涯を通して示された事柄を、祈りと交わりを通してしっかりと見て、わたしたちの教会のあり方で、具体化する歩みを重ねていきたいと思えます。